

審査の結果の要旨

氏名 包 慕萍

本論文はモンゴル地域の都市と建築の歴史的な変容状況を、フフホトを中心に取り上げている。従来、万里長城は中華の農耕文化とモンゴルの遊牧文化の境界線であった。しかしながら、17世紀にモンゴルの遊牧都市は仏教都市へ、18世紀になると、北アジアの中継貿易都市へと変身し、19世紀の後半から西洋の影響を受け、20世紀30年代から日本の植民地都市になった。以上のことを踏まえつつ、18世紀から20世紀までのモンゴル地域における都市と建築の歴史を系統的に研究し、その確立を行うことが、本研究の目的となっている。

まず、序章では、13、14世紀のモンゴル帝国時代の遊牧生活スタイルが含まれた城壁都市を考察し、モンゴル地域での都市建設活動の歴史的な連続性について言及している。

第1章では、16世紀末にチベット仏教がどのようにモンゴルへ導入されたのか、また、その寺院がどのように遊牧都市に取り入れられ構造化し、17世紀に至って定着したのかを探っている。チベット仏教寺院の発展は、モンゴル建築史において17世紀の時代を代表するものであった。そして、本論では、16世紀から18世紀にかけて形成されたチベット仏教を中心とする遊牧都市が、モンゴル地域の都市の「近世」と考えている。

第2章では、1723年から1861年までの間に、如何に遊牧的宗教都市が定住かつ貿易都市へと変貌を遂げたかを検証している。1727年に清朝がロシアとキャフタ貿易条約を結んでモンゴル地域が中国、ロシア、中央アジアの貿易の中継地となった。1820年代から1860年代までに、その商業の最盛期を迎え、フフホトは国際的な中継貿易都市として成立していた。そして、モンゴル地域で漢人、回民をはじめとした商業移民の手によって売買城が形成されたが、新たに成長した売買城と呼ばれた都市空間の構造は幾つの特徴にまとめられている。一つ目は、モンゴル、漢、回民族の多民族は都市住民を構成し、それぞれの民族の宗教、政治施設を中心に民族別に住み分ける都市構造に変容したこと。二つ目は、モンゴル人を管理する官署は前代と相変わらずフフホト城内に位置しているが、清朝工部の指令に従い「官式」に改築させられ、中華式の都市へと変貌していくこと。三つ目は、都市計画がなされなかった売買城の空間構造は、一見混乱しているが、実は内在する規律を持ってつくられてきたこと。街区の町割は方形にするのを基本とし、道路は重要度に応じて幅を変えて3段階に分けられ、更に袋小路を合せる手法で開発され、商業地と住居地が隣接しながらも、それぞれ独自の町割、構成、雰囲気が生み出されていったこと。四つ目には、遊牧都市は定住都市に変身したが、商店街の成り立ちや、ラマ寺院の門前広場、都市の各所に様々な種類の市場が位置するという事など、遊牧都市の空間構成が定住都市構造の中に取り込まれていることを示すことなどである。

第3章では、フフホト城の北東約2.5キロのところに、1739年に竣工された八旗城である綏遠城を通じて、八旗制度により計画されたこの都市及び建築の空間構造を明らかにした。具体的に、八旗方位の配置、建築配給における等級制度、八旗城の街区の構成と町割、を中心してその都市と建築の空間構造を明かにした。これらの建設は、すべて清朝官署建築の標準様式である「官式」で、工部により行われた。

第4章では、1862年から1959年までの、西洋からの影響によって進む近代化のなかで、モンゴル地域の都市と建築がどのように変容したのかを考察している。1860年から1900年までに西洋教会建築は、先にモンゴルに定着した山西民間建築の技術をベースにしてつくり出された。1900年代から1959年までが西洋で発明された近代技術への学習期となっていた。1910年代から20年代にかけて、民間では商業建築で洋風看板建築が最も流していた。1930年代になると、日本の植民地になり、建築家による都市計画と建設活動が登場した。フフホトでは、1930年代から1940年代にかけて策定、実施された都市計画はその代表的な例であった。続いて、1950年代になると、ソ連の影響下に入り、政府建築、大学キャンパス計画、工業地建設などが次第に「ソ連式」になっていったことを明らかにした。

終章では、アジア周辺地域における近代の都市と建築を考察するにあたっての研究視点を述べ、アジアにとっての「近代」というものを再考した。まず、周辺という言葉をもつ三つの意味で使うことを定義した。その一つ目は、清朝のアジアでの中心から周辺への統治構造、すなわち本部、藩部、土司、朝貢圏、互市圏といった同心円構造の中で周辺に位置すること。二つ目は、地理的に、中国から見ると周辺地域に位置すること。この地理的な位置が、後に中国と西洋との貿易の中継地になる客観的な条件であった。三つ目は、度重なる外来の都市と建築文化に影響され、自文化が大きな変容を遂げたこと。すなわち、外来文化を受容する立場にあった。このような周辺地域では、17世紀以来、アジアの商業、農業移民を受け、また、後に西洋的な影響を受けたことで社会、都市が大きく変化させられた。本論では、このアジアの周辺地域では、近世都市・建築文化の根幹となる都市構造が変容したかどうか、華人（漢人）商業移民による都市と建築がどういった変容が起きたか、その上に西洋からの影響を検証するのはこれらの地域の「近代的な変容過程」であると考えている。

以上の通り、本研究では、18世紀から20世紀までのモンゴル地域の都市と建築の成立過程を始めて通史的に明らかにした。そして、アジア周辺地域の北部の例として、アジアの都市と建築の近代化の多様性を示し、今後のアジア近代都市・建築史研究における新たな展開を拓いたものと言えよう。

よって、本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。